

一二六 清明を試みる僧の事「卷十一・三」

一二七 清明かへる殺す事「卷十一・三付」

安倍清明（あべの せいめい・はるあきら）は平安朝廷の陰陽師として、平安時代に人々に広く信じられていた占い・陰陽道のカリスマであった。

清明を試みる僧の事「卷十一・三」

¹ 昔、清明が土御門の家に、老しらみたる老僧来たりぬ。十歳ばかりなるわらはべ二人具したり。清明「なにぞの人にておはするぞ」と問へば、「播磨の国の者にて候。陰陽師を習はん心ぎしにて候。此道に、殊にすぐれておはしますよしを承はりて、少々習ひ参らせんとて、参りたるなり」といへば、清明が思ふやう、この法師は、かしこき者にこそあるめれ。われを試みんとてきたる者なり、それにわろく見えてはわるかるべし、この法師すこしひきまきぐらんと思ひて、共なる童部は、式神をつかひてきたるなめりかし、式神ならばめしかくせと、心の中に念じて、袖の内にて印をむすびて、ひそかに呪をとなふ。さて法師いふやう、「とく帰り給ね。のちによき日して、習はんどのたまはん事どもは、教へ奉らん」といへば、法師「あら、貴と」といひて、手をすりて額にあてて、たちはしりぬ。

いまは去ぬらんと思ふに、法師とまりて、さるべき所々、車宿などのぞきありきて、又まへによりきていふやう、「この供に候つる童の、二人ながら失ひて候。それ給はりて帰らん」といへば、清明「御坊は、希有のこといふ御坊かな。清明は何の故に、人の供ならん者をば、とらんずるぞ」といへり。法師のいふやう、「さらにあが君、おほきなる理⁴り候。さりながら、たゞゆるし給はらん」とわびければ、「よしよし、御坊の、人の心みんとて、式神つかひてくるが、うらやましきを、ことにおぼえつるが、異人をこそ、さやうには試み給はめ。清明をば、いかでさるごと、し給ふべき」といひて、物よむやうにして、しばしばかりありければ、外の方より童二人ながら走入て、法師のまへに出来ければ、その折、法師の申やう、「実に試み申つるなり。使ふことはやすく候。今よりは、ひとへに御弟子になりて候はん」といひて、ふところより、名簿⁵ひきいでて、とらせけり。

¹ 傍線は読解に役立つ重要語。数字は読解で意識するポイント。

² 話の展開として、清明が直感で何を感じたのか説明せよ。

³ 法師＝老僧は何を思つてこう言ったのか。

⁴ もっともであるが、ただ許してほしい、と老僧は困る＝詫びる。では、この子供二人は式神ではなくて、実の子だったのか。それとも式神自体を取り返したいのか。

⁵ 平安時代に従者が主人に奉仕のあかしとして渡した、現代でいえば履歴書かな。

安倍晴明は教科書では、歴史書「大鏡（花山天皇の出家）」で政治の異変を察知する場面でも出て来る。歴史書に出て来るほど神格化もされていたようだ。式神という紙（ここでは子供・草）などを神にみたてする呪術・祈祷・シャーマニズムのようなもの。現代でも、映画やゲームなどに度々取り上げられる。

一二七 晴明かへる殺す事「卷十一・三付」

この晴明、あるとき、広沢の僧正の御房に参りて、もの申しうけたまはりけるあひだ、若僧⁶どもの、晴明にいふやう、「式神を使ひ給ふなるは、たちまちに人をば殺し給ふや」といひければ、「やすくはえ殺さじ。力をいれて殺してん」といふ。「さて虫などをば、少しのことせんに、かならず殺しつべし⁷。さて生くるやうを知らねば、罪を得つべければ、さやうのこと、よしなし」といふほどに、庭にかはづの出できて、五六ばかり躍りて、池のかたぎまへ行きけるを、「あれひとつ、さらば殺し給へ。試みん」と、僧のいひければ、「罪をつくり給ふ御坊かな。されども試み給へば、殺して見せ奉らん」とて、草の葉をつみきりて、物をよむやうにして、かへるのかたへ投げやりければ、その草の葉の、かへるの上にかゝりければ、かへる、まひらにひしげて、死にたりけり。これをみて、僧どもの色かはりて、おそろしと思ひけり。

家の中に人なき折りは、この式神をつかひけるにや、人もなきに、しとみ蒞をあげおろし、門をさしなどしけり。

⁶ 若僧の態度はどのよ
うに描かれているか。
平安時代の僧侶は現
代の教師・医師のよ
うな先生業で、清少
納言も否定的に描い
たりしている。

⁷ 生くるやう、殺すこ
とはできても生きか
えらせることができ
ないということ。